

白河街区跡 発掘調査現地説明会資料

令和 元 年 6 月 22 日
株式会社 文化財サービス

所 在 地：京都市左京区岡崎天王町26番 5
調査期間：平成31年 3 月25日～令和元年 7 月10日（予定）
調査面積：531平方メートル

はじめに

当地は東山山地と北の神楽岡（吉田山）丘陵の間を南流する白川によって形成された扇状地から鴨川左岸の平地へと続く地域で、東本願寺岡崎別院・岡崎神社・金戒光明寺などの寺社が近接しています。

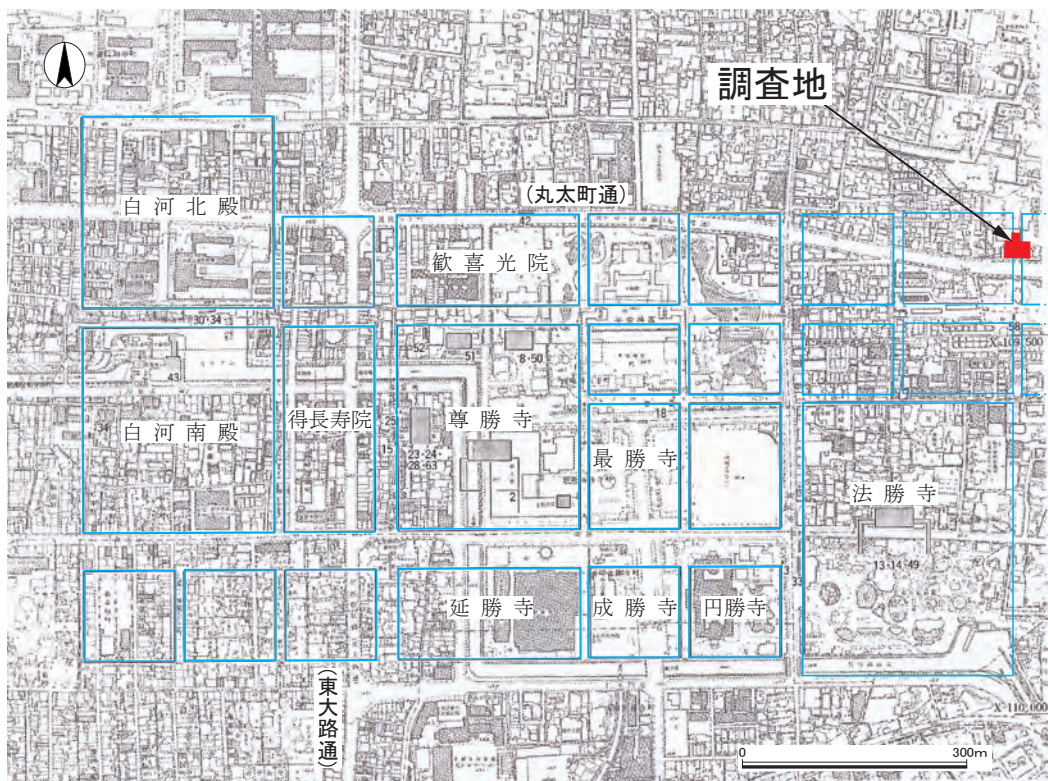
風光明媚な地である当地には、平安時代には藤原氏などの有力貴族の別荘などが造られていました。調査地付近には平安時代中期頃、東光寺という寺院が建立されたといわれています。

平安時代後期に入り、天皇を引退した上皇による政治（院政）が始まると、当地一帯がその拠点として開発・整備されました。それを「白河街区」と呼び、平安京にならった条坊制による区画割で街づくりがおこなわれたことがわかっています。今回の調査地は、その白河街区の北東隅にあたります。

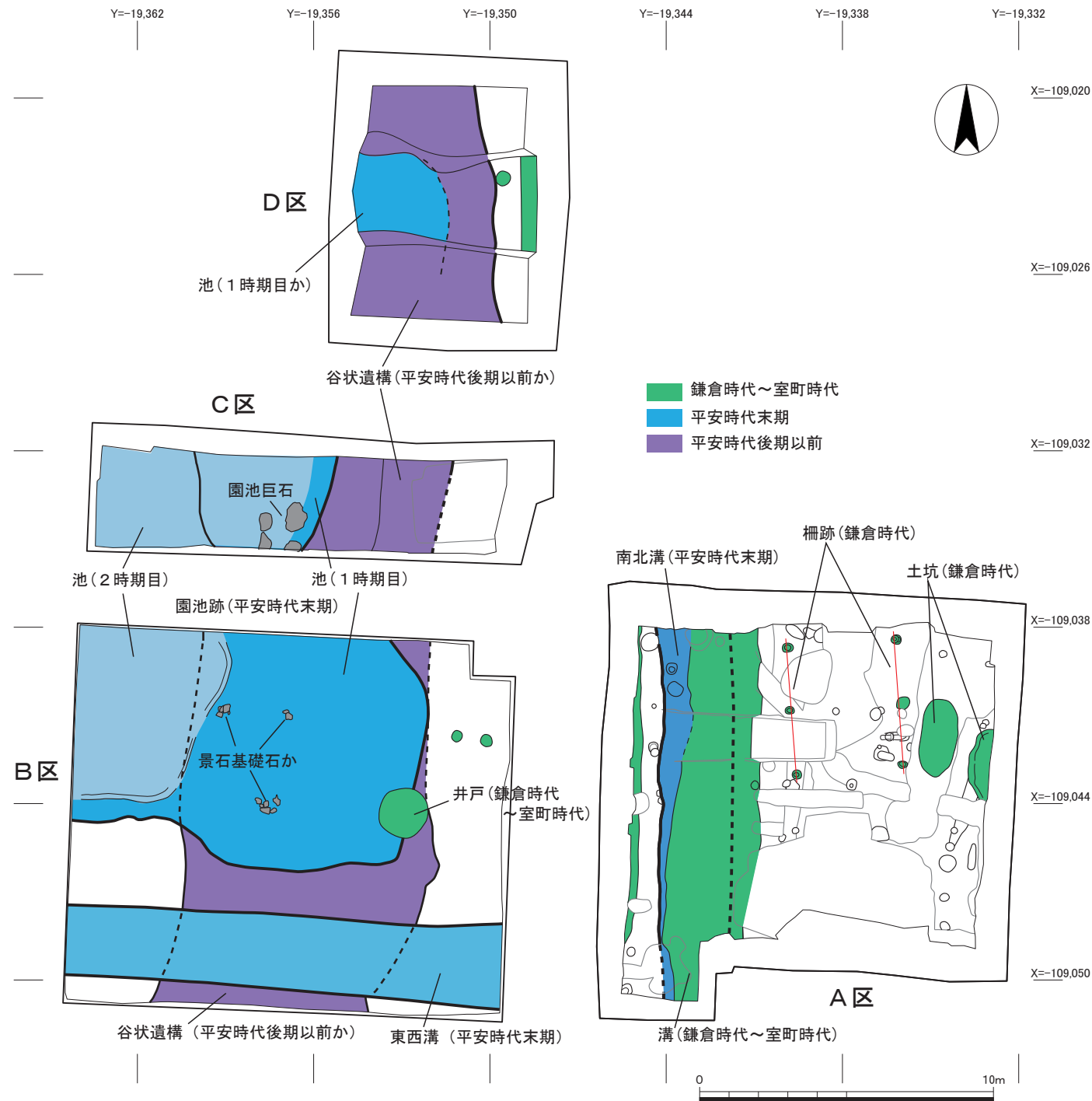
平安時代末期、平氏などの武士の勢力が拡大するにつれて院政は衰退し、白河街区も衰退していきます。室町時代には応仁の乱で当地も戦場となり、東光寺や白河街区の中心的な寺院である六勝寺などが焼失してしまいます。一部の寺社は再建されましたが、以降は江戸時代にかけて主に畑地中心の農村に変わっていきました。幕末の動乱期には、京都に駐屯するための諸藩の藩邸が建ち並ぶ活気の戻った時代もありましたが、明治維新による東京遷都にともない、ふたたび農村へと戻っていきました。

見つけた主な遺構

- ・**鎌倉時代～室町時代**……南北溝（A区）、柱穴、柵跡、土坑（A・C区）、井戸（B区）。A区では平安時代の南北溝とほぼ同じ位置に掘りなおされた溝が確認できました。土の堆積状況から、水の流れた溝であることがわかりました。同じくA区で見つけた大きな穴（土坑）には、鍋や釜・皿がたくさん入っていました。お墓もしくは吊いのお祀りで使った道具を埋めたのかもしれませんが。
- ・**平安時代末期**……南北溝（A区）、東西溝（B区）、園池跡（B・C・D区）。A区の南北溝は幅約2.4m、深さ約0.7mで断面逆台形の溝です。B区の東西溝は幅約2.7m、深さ約0.9mで同じく断面逆台形の溝です。東西溝の北、B区からD区へと広がる園池跡は2時期あり、後述する谷状遺構の上に造られています。1時期目の池は灰色の粘土が堆積したもので、2時期目の池は4石の巨石が伴うものです。
- ・**平安時代後期以前か**……谷状遺構（B・C・D区）。園池が造られる以前に存在していた、B～D区を南北に縦断しさらに今回の調査区外南北方向に続くとみられる幅約8.0m前後、深さ1.0m以上の大規模な谷状の遺構が見つかっています。調査途中でその性格は不明ですが、水が集まりやすい地形で、この谷状遺構が埋まり始めてから園池などを造作に利用しやすい状態となり、池を造ったと考えられます。



白河街区地割復元図・調査地位置図 S=1/10,000



調査区・遺構配置図 S=1/200

まとめ

今回の調査で注目される遺構は、白河街区の区画地割溝と考えられる南北溝と東西溝、街区内に広がりをもせる園池跡、それらの構築以前に存在していた大規模な谷状遺構が挙げられます。

A区の南北溝は従前からの白河街区復元地割に基づく、法勝寺東辺道路の北延長にあたる可能性があります。B区の東西溝については、区画内に設置された溝とみられ、A区南北溝より1.0mほど低い位置に造られており、南北溝には繋がりません。東西溝はA区とB区の間で終息している可能性が高いと思われます。その場合、A区とB区の間には街区造成時に段を造っていた可能性があります。

園池跡については、白河街区で初めて見つかった平安時代の園池となります。下層に谷状遺構があり、その水脈を利用して造られた可能性が高いものです。園池に伴う建物の痕跡は今回見つかりませんでしたが、藤原氏の別荘もしくは東光寺との関係が予想されます。

今回の調査は、これまであまり発掘調査の行われてこなかった白河街区北東地域で、区画地割の状況が一部判明したこと、街区内の土地利用の状況が垣間見える貴重な成果を得ることができました。



A区 平安時代末期南北溝（北西から）



B区 平安時代末期園池跡 全景（東から）



A区 平安時代末期南北溝 遺物出土状況（北から）

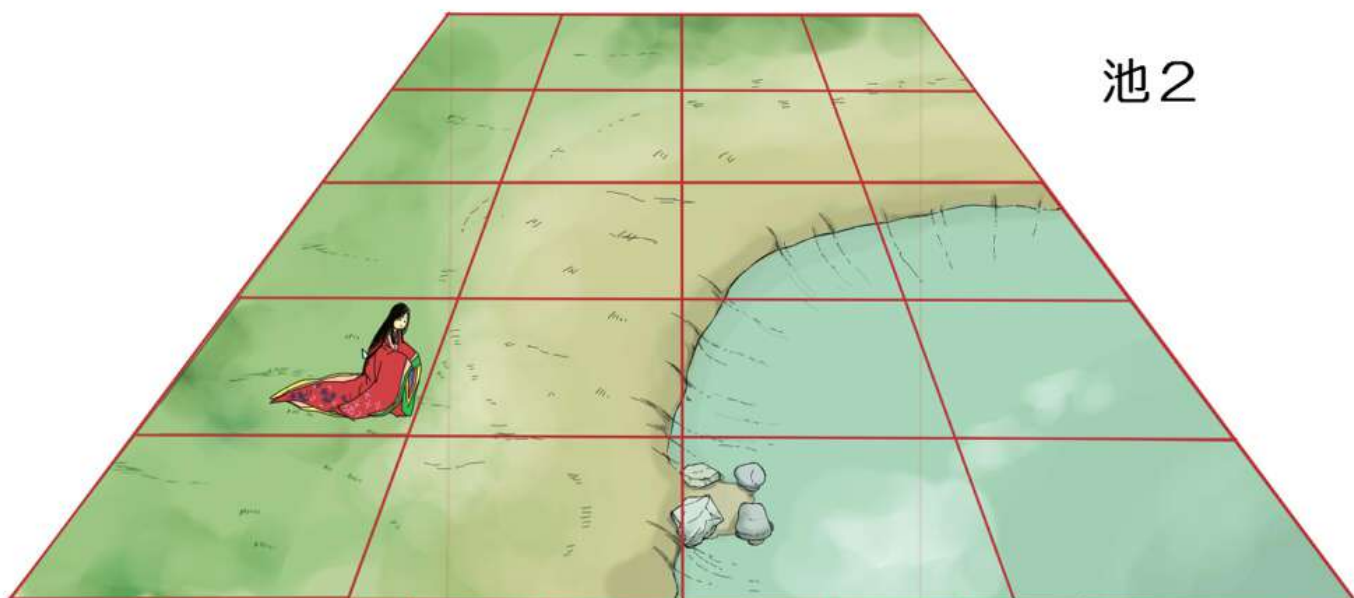


A区 鎌倉時代土坑 遺物出土状況（北西から）

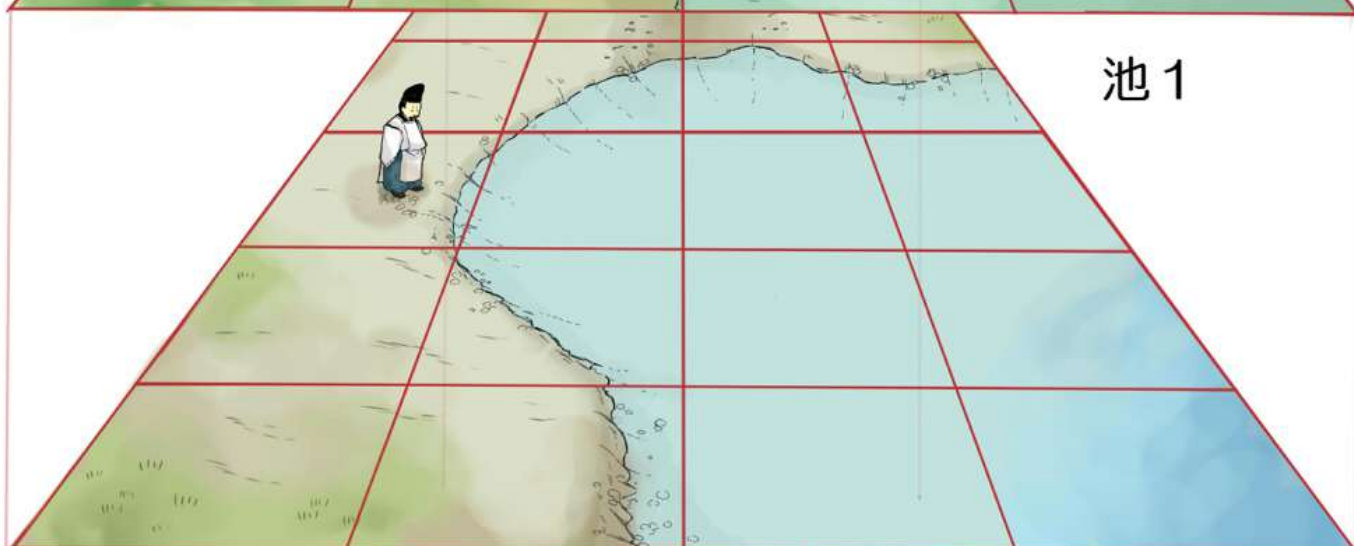


C区 平安時代末期園池跡 巨石検出状況（南東から）

池2



池1



谷

